

# 矢板

## 伝統文化

# 時間

「矢板市の伝統文化とは何か」これを言葉で表すのはとても難しいことです。ある辞書によれば、伝統文化とは「世代を超えて受け継がれた精神性」や「人間の行動様式や思考、慣習などの歴史的存在意義」と記されています。

私たちの住む矢板市には、遠い遠い昔から今日まで脈々と受け継がれてきたものがあります。それは、私たちが普段通りに生活する中で、共有しながら受け継がれてきた生活様式や、様々な習慣、慣習・価値観などです。

そして、集落などの狭い範囲の地域社会においては、それぞれの特性が生み出した固有の習慣・慣習や生活様式、また、生活に根付いた技芸や風習も長い歴史の中で常に形を変えながら受け継がれています。

矢板市は、「代表する伝統文化はない」と言われることがありました。しかしながら、本当にそうでしょうか。気が付いていないだけではないでしょうか。当たり前のように感じていることの中にも、さまざまな形で今日まで継承・伝承されてきたものが数多く含まれているはずであり、これからも伝えられていくことでしょう。

今号では、矢板市の伝統文化の中から、日常生活の道具から一歩抜け出した美術品や工芸品の中で、受け継がれる技を持つ「匠」を紹介します。

私たちの身の周りにも多くの伝統文化が息付いています。それらの価値に目を向けて、矢板の伝統文化とは何かを考えてみてはいかがでしょうか。

矢板  
伝統文化  
時間



加藤 慎平  
Kato Shinpei

1957年塩谷町生まれ。矢板市内に刀鍛冶場を構えている。  
人間国宝 宮入行平に入門、その後上林恒平に師事。今年度の日本美術刀剣保存協会主催の新作名刀展「短刀・剣の部」で特賞を受賞するなど受賞歴多数。現在は、日光東照宮に奉納する御奉納刀を製作中。



◀ 刀作りには、大量の炭を用意する。工程ごとに形や大きさを変えて準備しなければならない。

▶ ここぞという時のために取っておいた玉鋼の塊。現在では、なかなか手に入らないという。



◀ 使い込まれた道具の数々はほぼ手作り。その中には自分だけのオリジナル道具も多くある。

## 矢板の匠 「刀と共に生きる」

### 魅せられて

高校生の時に初めて正宗を見た瞬間に魅せられて、自分でも作ってみたいと思ったことがこの世界に入ったきっかけです。正宗のように鎌倉期に作られたものが名刀と言われています。しかし「正宗を目指す道と道を間違えよう」と言われるように始めから狙って作ってはいけないとも言われています。例えるならば抽象画のようなものです。

鎌倉期の刀の良さはまとっている風格が違うことです。鉄、水、空気、わらなども当時とは異なるので、今となっては再現することはできません。

### 弟子入り時代

親は大学を出てほしかったと思いますが、どうしても刀鍛冶になりたくて、大学入学後すぐに中退し、宮入行平師匠に弟子入りしました。弟子時代には、先輩たちに段取りをみっちりと仕込まれました。師匠が次に何をやるのか、そのために何を準備しておくか、そのために何を準備しておくか、そして万が一の時の予備はあるのかなど。それが今になってすぐ役に立っています。

当時、衣食住付きで技術を学ぶことができ、毎月4～5千円のお小遣

いをもらっていましたが、それが余るくらい刀作りだけに没頭していました。今は、宮入行平最後の内弟子として、「平」を名乗ることを許されています。

### 刀作り

作り始める前には、頭にはっきりとしたイメージを持ち、完成までの日数を逆算して物事を進めていきます。材料や炭をどの位用意したらいいのか、道具はどのようなものを作ればいいのかなど、段取りが命です。

刀作りは、火を使うので冬場がシーズンです。作り始めると火を絶やしたくないので、朝から夕方まで一気に作り上げます。そのため汗で体重が落ちたり、また溶けた鉄が飛ぶこともあるので、腕にやけどの模様ができるようになってしまいます。

刀作りの難しいところは、最後になってそれまでの工程が成功していたか分かることです。自分ではうまくやったつもりでも、研ぎ師に出してから刀身に傷や割れがあり、駄目だと分かることもあります。そのため、1本だけではなく、常に予備の刀を作っておきます。これも同じ時に作ると気候や湿度、材料、火の加減などが似て、出来に差が生じないので、時期を少しずらして作るよ

うにしています。予備もうまくいくときもあるし、全部駄目なこともある、そこが難しいところですよ。

### 想いや課題など

大切なことは、ずっと良いものを作りたいという心です。極論を言えば今の時代に刀はいらないものです。ただ切るための道具ならば他にも用途に応じてたくさんあります。

刀は、私が作る工程が終わると、研ぎの職人に渡し、鉦（はばき）や鞘の職人がそれに応じて作るなど、多くの人の手を経てからやっと完成します。注文を受けてから最低でも一年はかかってしまいます。しかも私は趣味でやっているわけではなく生業としてやっているの、そこを理解していただくのが難しい時代かもしれません。

### これから

私は何と云っても刀が好きです。とても美しいと思うし、鍛えている時（鉄を折り返している時）が一番好きです。好きでないとやっていけないと思います。いつかは、正宗に近づけるようになりたいと思います。しかし、鎌倉期の正宗と同じものを作りたいのではありません。同じ風格を持った刀を作るのが夢です。

## 比翼の束・特別版 矢板の伝統文化に新しい風

人にそれぞれ品格があるように、自治体にも品格というものがある。そしてそれは、自治体が継続的に発展し成長を遂げるための原動力となる。

「品格のある自治体」とは、住民が自らのまちは自らが良くするという自治の精神が旺盛であること。市民一人ひとりが卑劣な行為を憎む心など、道徳性が身に付いていること。

美しい心、情緒を育む自然環境が豊かで、学問、文化、芸術など精神性を尊ぶ土壌があることなどがあげられている。

(藤原正彦「国家の品格」引用)

私たちの矢板市は、雄大な高原山や田園風景など緑豊かな大地が広がる。

川崎城跡など歴史的遺産やさまざまな文化が息付き、品格ある自治体としての要素は十分備わっている。

後は、市民一人ひとりのふるさと矢板についての心の持ちようである。

足もとをしっかりと見つめ直し、「ないものねだりではなく、あるものさがし」で市民力のみなざる矢板市にしようではないか。

そもそも日本人は、農耕を<sup>なりわい</sup>生業とし自然とともに生き、自然そのものに感謝をし生活の安泰を願ってきた。

そして人生の節目節目にさまざまな行事を行い、それぞれの成長を祝いながら、自分たちの祖先に感謝し代々の繁栄を祈ってきた。

しかし時代の変化とともに私たちは生活の豊かさ、快適さを追い求め、その一方で長い歴史の中で培ってきた生活の知恵や伝統行事の多くが忘れられ、失われつつある。

こうした状況の中で、市民の一部の方々から、矢板市に住む、矢板市の生んだ優れた伝統文化の保持者による「伝統文化の集い」を開催し、薫り高い文化のまちを築き上げようとする「新しい風」が吹き込まれつつある。誇りを感じているところである。

矢板市長 遠藤 忠



矢板市在住または出身の全国的にも著名な文化人たちの考え方に触れ、矢板市の伝統文化について考えます。

ぜひ皆さんお誘い合わせの上、足をお運びください。

問い合わせ／生涯学習課 ☎(43)6218

日時／6月20日(土) 13:30～

場所／矢板市文化会館大ホール

入場無料・全席自由

■第一部 講演会 13:40～

「刀匠 加藤慎平 語る」

名刀正宗に魅かれ日本刀の神髄に迫る日々

■アトラクション 14:30～

剣舞「楠公を詠ず」

遊月流吟舞会 四代目宗家 鈴木 遊月

■第二部 矢板が生んだ三大巨匠対談 14:45～

「伝統文化への想い」



# 伝統文化の集い

表題 柿沼翠流書



刀匠  
加藤 慎平

1957年塩谷町生まれ。刀剣界最高峰と謳われた人間国宝宮入平に入門し、平を名乗る最後の内弟子となる。その後上林恒平に師事。市内に刀鍛冶場を構えている。新作名刀展特賞・優秀賞、栃木県文化奨励賞など受賞多数。



書家  
柿沼 翠流

1936年塩谷町生まれ。手島右卿氏に師事。書の芥川賞と言われる手島右卿賞を受賞。ヨーロッパ巡回日本の書展に招待出品。現在市内で書の普及に尽力中。佐久市立近代美術館に作品「命」收藏。第1回マロニエ文化賞など受賞多数。



鰯工舎  
小川 三夫

1947年矢板市生まれ。宮大工「西岡常一」の唯一の内弟子で、日本を代表する宮大工。寺社建築専門の建築会社「鰯工舎」の創始者。弟子と共に国土安穩寺、日本寺ほか全国各地の寺院改修、再建、新築にあたるとともに後進の育成に努める。



対談コーディネーター  
伐木特殊技術保持者(市無形文化財)  
和氣 邁

今回、伝統文化の集いで3人の方に話を聞きだすコーディネーターを仰せつかりました。矢板の巨匠たちの話を身近に聞けることはとても光栄なことです。

伝統文化とは、「繋ぐ」ことだと言われています。3人の方がどのように師匠から受け継いだ伝統を繋ごうとしているのか、そして師匠からの教えとは違う自分自身をいかに確立しようとしているのかを伺ってみたいと思います。

また、日々の生活の中で、支えてくれている大切な家族、特に奥様についても伺ってみたいですね。

さらに、「芸術を理解できないものは大成しない」と言われますが、皆さんの極みの技に活かされている美意識についても伺ってみたいです。

いずれにしてもこれだけの方々のお話を一堂に聞ける機会はないので、多くの方にご来場いただき、伝統文化に触れて欲しいと思います。